

# 梶井基次郎研究

——〈闇〉との関係性から探る生き方の形成と変化——

佐藤 憲 昭

## 一 本稿の目的

梶井基次郎にとって〈闇〉の存在とは、作品内における彼の文学的な特徴の一つに留まらず、自らの生き方にさえ影響を与えた非常に重要な存在であると考えている。梶井が〈闇〉を意識し始めたのは二五歳、伊豆湯ヶ島での転地療養の時期からである。一七歳で結核を患い、病は止まることなく進行し、湯ヶ島での梶井は死の影を現実的に感じていた。梶井の作品にしばしば見受けられる鬱々とした表現や〈闇〉の描写には、結核による将来への絶望と死への恐怖が根底にあることをまずは押さえておきたい。生きんとする意志が破れさつていく時期に梶井は〈闇〉を意識するようになっていく。三二歳で逝去した梶井だが、湯ヶ島滞在以降、〈闇〉が梶井の生き方にとってどう関与していたのかを探ることが本稿の目的である。

梶井が湯ヶ島に滞在したのは昭和元年の一二月から昭和三年の四月までの二年五カ月の間である。湯ヶ島を出た約二年後においても梶井は「闇の絵巻」を発表しており、〈闇〉を意識し続けたことが伺える。湯ヶ島での体験に基づいて執筆したと見なされている作品は、作品成立順に「蒼穹」寛の話」「冬の蠅」「闇の絵巻」の四作品があり、これらすべてに〈闇〉に関わる内容

が書かれている。このことから、湯ヶ島での滞在期間自体が梶井と〈闇〉の関係において非常に関わりが深い出来事であると予想でき、湯ヶ島での体験に基づいて執筆されたこれらの作品は、梶井と〈闇〉の関係を研究するにあたって必要不可欠な存在である。

「闇の絵巻」以降の作品には〈闇〉に関する記述が全く出てきていない。これらのことから「闇の絵巻」には、梶井の〈闇〉をめぐる体験とその関係性の集束が予想できる。「闇の絵巻」以前の三作品で〈闇〉がどのように表現され、どのような経緯を経て最後「闇の絵巻」へと集束していくのかに着目することで、梶井にとって〈闇〉とはどのような関係性を持ったものへと行き着くのかを明らかにしたい。またその〈闇〉と関わることにより形成されていく梶井の生き方を探り、遺作である「のんきな患者」へのつながりも含め、変化の道りと終着点を探る。

## 二 〈闇〉に関する先行研究

須藤松雄<sup>〔1〕</sup>は湯ヶ島時代の〈闇〉には、深い親しみを感じた自然美としての〈闇〉と、深い絶望や死を暗示させる〈闇〉

の二系統が存在すると論じている。「蒼穹」「寛の話」「冬の蠅」には後者の〈闇〉の性質が色濃く表れているという。それらとの比較から「闇の絵巻」の〈闇〉特殊性について論じている。熊木哲<sup>②</sup>、五十嵐誠毅<sup>③</sup>の両氏は、「闇の絵巻」がこれまでの梶井の〈闇〉の在り方であった恐怖から安息へと移る転換期と成り得る作品であると指摘している。

時代は平成に入り、安藤靖彦<sup>④</sup>は「闇の絵巻」は梶井の〈闇〉の明確な転換期ではなく、あくまで転換の途中である作品であるとの指摘をしている。そして梶井の〈闇〉は恐怖、絶望の面と並存しつつ、安息の面へと着実に歩を進めているとの見方を新たに提唱している。

いずれの先行研究も、湯ヶ島時代の「冬の蠅」「蒼穹」「寛の話」に描かれた〈闇〉は「死」「絶望」「不安」「恐怖」へと結びついており、「闇の絵巻」に描かれた〈闇〉は「親しみ」「安堵」「安息」へと結びついているという点が共通している。「闇の絵巻」は、梶井の〈闇〉に対する心境が恐怖、絶望の面から安息へと変化する大きな転換期としてその転換を達成した作品であり、〈闇〉は安息をもたらす親しみある存在へと落ち着くとの見方が強いようである。「闇の絵巻」までの〈闇〉の形成過程を今一度検証し、〈闇〉との関係性を探っていく。

### 三 「蒼穹」〈闇〉の自覚

「蒼穹」は昭和三年三月に雑誌『文芸都市』に発表された。湯ヶ島での題材が使用された最初の作品であり、〈闇〉という言葉

を明確に強調して書かれたのもこの作品が最初である。「蒼穹」に登場する〈闇〉は、湧き上がっては消える雲に疑問と不安を感じ、白日の青空に主人公の「私」が〈闇〉の存在を確信するという場面で書かれている。

白日の空に〈闇〉を自覚した「私」の心境は、恐怖の面を強調した性質であったと言える。何に惑わされたわけでもなく、「私」自身の自発的な悟りによって〈闇〉の姿は現れたのである。「闇」が「私」の中へと生まれたとき、「私」が最初に感じたのは恐怖、不安、大きな不幸といったものであり、決して安息のような心境ではなかったという事が明確に読み取れる。

そしてもう一つ、〈闇〉の中へと消える男の話が挿話として書かれている。「闇の絵巻」においても酷似した内容の話が書かれており、同じ体験を基にした挿話であると考えられる。この二作品に共通する〈闇〉の中へと消える男の挿話には、「私」の心境が二作品間で異なった表現が用いている。「蒼穹」では、〈闇〉への「微かな戦慄」と、自分も消えていくことへの「云い知れぬ恐怖と情熱」を覚えたと言われており、恐怖の心境が強調されている。しかし「闇の絵巻」では「一種異様な感動」という恐怖とは異なる心境を「私」は抱いている。この違いからも、「蒼穹」においての〈闇〉は、恐怖が主題となっていることが伺える。

「蒼穹」においては、「闇の自覚」という変化が「私」の中に起きていることが読み取れる。そしてその自覚は紛れもなく恐怖から始まったことが読み取れた。

#### 四 「寛の話」 理想の光の喪失

「寛の話」は昭和三年四月に雑誌『近代風景』にて発表された。この作品は主人公「私」の自意識の動きを極限まで細かく追及していくことを目的とした作品ではないかと考えている。この作品を須藤<sup>1)</sup>は、「生の両極の分裂が主題である」と述べており、自意識の分化を自覚した「私」に残されたのは絶望であり、ともすれば絶望の自覚でもあったとして、「蒼穹」と同じく「私」の暗い陰鬱な側面に焦点をあてた作品であるとしている。

作中には〈闇〉という言葉は使用されてはいないが、〈闇〉に相当する言葉として「暗黒の絶望」といった言葉が書かれており、対比する言葉として「理想の光」という言葉が使用されている。「寛の話」には白い、光を連想させる言葉が湯ヶ島時代の作品のうちで最も強調して使用されており、「束の間の閃光が私の生命を輝かす」や「理想の光に輝かされ」のように〈闇〉とは反対の事象に「私」が遭遇するというが「寛の話」の特徴であると考えている。

この「束の間の閃光」によって「私」は「同じ現実から二つの表象を見なければならなかった」としている。一方は「理想の光」もう一方は「暗黒の絶望」と表現し、それらが一つに重なる退屈な現実姿を変えてしまう。そのことで「私」は「課せられているのは永遠の退屈だ。生の幻影は絶望と重なっている」という自覚を得るといった過程を辿ることとなる。

「私」の絶望は何を拠り所にして生まれているのかを考えると、それは絶望という未来が存在することを自覚したことよりも、

「理想の光」と表裏を成した存在として絶望を自覚したことが大きいのではないかと考えている。「理想の光」を目指していることは同時に絶望へと進むことだと理解できてしまい、生きる意味さえも見いだせなくなった退屈な状態に「私」は追い込まれてしまったのである。このような閉塞的な状態を経験したことで、その後の「冬の蠅」において「私」の中に絶望の側への情熱を持つような志向が芽生えたのではないかと考えている。

ここで問題となってくるのは、表裏を成した存在であるにも関わらず、「理想の光」の側、つまりは生の側のみに「幻影」という言葉を付随させているという事だ。絶望を「幻影」であるとは考えないのである。それほどまでに「私」の志向の針は絶望の側に傾いているという事が分かる。

〈闇〉への、または絶望への情熱に駆られた「私」の脳裏には、もしかしたら見返りがあるかもしれない、事態が好転するかもしれないといった淡い希望などは一切存在しない純粹な衝動であるといえる。「寛の話」には、〈闇〉への情熱が生まれるべくして生まれ、そこへ進むしかないという宿命の道筋が整ったことが示されている。「蒼穹」と同じく〈闇〉の恐怖、陰鬱を主題とした作品であると言わざるを得ない。

無論、「私」からは〈闇〉に対して安息を求めているような行動や心境は読み取れず、〈闇〉の安息側はまだ見られないという結論に至った。

## 5 「冬の蠅」〈闇〉への情熱の覚醒

「冬の蠅」は昭和三年五月に雑誌『創作月刊』にて発表された。絶望への情熱を主題に置いた激しさが特徴的であり、梶井の鋭敏な感性が大いに発揮された作品である。作中での「私」はいつになく行動的であり、衝動を引き起こす〈闇〉への情熱の大きさが容易に伝わってくる作品である。須藤は「冬の蠅」の〈闇〉の位置付けを、典型的な恐怖、絶望の〈闇〉として解釈している。(1) 死を意味し、そのなかに生きるよりもはや何ものもないという暗い情熱と行動とを激発させる〈闇〉といった激しい〈闇〉の存在を認めている。この意見には私も大きく賛同する。

〈闇〉を求め、そのなかに活路を見出すという、これまで見てきた「蒼穹」「算の話」には見られなかった力強さが伝わってくる。〈闇〉の暗い情熱が、生きんとする情熱の裏返しであるという面目を文章中に明示している。そして、その暗い〈闇〉への情熱に基づく激しい行動の実効的な表現を初めて書き出している。閉塞的な限界的情况を打破したことを決定的なものとしてしているのだ。〈闇〉への情熱、自暴自棄の精神がまさに「冬の蠅」において極まっている。この時期の梶井の志向の針は言うまでもなく〈闇〉の絶望の面に向いている。〈闇〉と絶望への情熱を行動として実現させ、そこに一定の生きる場所を見出した。しかし梶井自身がその情熱はあくまでも絶望しか残されていない自分の最後のあがきのようなのだと自覚しているはずである。

この〈闇〉への情熱が大きければ大きいほど、「私」の生き

る道は悲劇的である。おそらくは長くはもたない、近いうちに破滅を迎えることが決定的な生き方である。いうなれば究極のやせ我慢をしているかのように感じられる。それでもなお、その生き方を選んだ梶井の悲劇性には心を打つものがある。もはや〈闇〉の中でしか生を実感できなくなってしまうという、深刻な内面が浮き彫りとなっているのが「冬の蠅」なのである。〈闇〉を愛するといった心境には到底たどり着けるとは思えない。「闇の絵巻」が昭和五年（一九三〇年）の八月に脱稿を果たしたので、約二年の歳月の間に大きな心境の変化が梶井にあったと考えるのが妥当である。

ここまでの三作の考察をまとめると次のようになる。

### 「蒼穹」

- ・〈闇〉の自覚の始まり〈闇〉の性質は陰鬱であり「大きな不幸」
- ・挿話から連想されるものは「恐怖」「戦慄」「情熱」
- ・〈闇〉への情熱の微かな芽生え

### 「算の話」

- ・「理想の光」と「暗黒の絶望」の表裏一体関係を自覚し絶望
- ・生きる意味の喪失 生は幻影であり退屈を生きる宿命を悟る
- ・活路を見いだせない閉塞的な状態

### 「冬の蠅」

- ・〈闇〉を求めその中に活路を見出す
- ・自暴自棄の精神極まり激しい絶望への情熱を持つ
- ・〈闇〉への安息や愛は存在しない 存在するのは激しい情熱のみ

三作品とも、「私」が異なるそれぞれの転機を迎えている作品である様子が読み取れた。「蒼穹」「寛の話」「冬の蠅」と次第に〈闇〉との関係が深いものへと進んでいる。これは結核の進行に伴っての必然の進行であると思われる。これら三作からは、「蒼穹」において【闇】の自覚、「寛の話」において【理想の光】の喪失、「冬の蠅」において【闇】への情熱の覚醒」といったそれぞれ「私」の転機となる変化を読み取ることができた。破滅への道筋を歩んでいる「私」の姿が浮き彫りとなり、その宿命を変えることのできない「私」の悲劇が鮮明に伝わってくる。

その後「私」と〈闇〉の関係のすべては「闇の絵巻」へとつながり、集束していくわけだが、果たして安息へと落ち着くのであるうか検証していく。

## 6 「闇の絵巻」生の実感と諦念の獲得

「闇の絵巻」は昭和五年一〇月に武蔵野書院発行『詩・現実』第二冊に発表された。「私は闇を愛することを覚えた。」と冒頭で明言しているように、これまでの〈闇〉の作品には見られなかった親しみが「闇の絵巻」には確かに見受けられる。これまでの〈闇〉との関係性にさらに変化があったことは間違いないだろう。

〈闇〉の街道を歩いていくこの作品には大きな二つの局面が存在する。ひろびろとした展望への到達の場面と、その後の最後の巨大な〈闇〉への侵入の場面であるが、この連続する二つ

の場面ではそれぞれ全く異なる心境を「私」は抱いている。

展望の場面では「私の心には新しい決意が生れて来る。秘やかな情熱が静かに私を満たして来る。」という心境に至った。「冬の蠅」でのような〈闇〉への情熱からくる自暴自棄な態度ではなく、生きんとする意志を強く持つて生きていく「新しい決意」の強さを強調している表現が「秘やかな情熱」であると考えた。その決意を持つて、「私」が自分自身に運命付けられている〈闇〉に向かつていく意志が感じられるのである。

最後の巨大な〈闇〉への侵入の場面では、「私」は安息とは程遠い心境に置かれていると考えている。複雑な言葉の表現ではなく、明確な言葉を梶井は文章の中に選択し、恐怖の念を書いている。展望の場面で「私」は、生きんとする意志を改めて強固なものにして、絶望を抛り所とするのではない、新たな挑戦ともいえる心境で〈闇〉へと進む決意を示した。しかしこの場面では明確に恐怖が「私」を支配している。〈闇〉へと挑戦する「私」の意志は確かに存在していたのだが、〈闇〉の中ではその意思は混乱してしまっている。「私」は自暴自棄の精神である絶望への情熱に駆り立てられて〈闇〉へと向かったのではなく、新たな決意なるものを原動力としていたはずである。しかし結果は、心に恐怖と混乱を抱いている。ということは、決意を新たにすることは確かだが、巨大な〈闇〉の中という条件下でその決意が揺れ動いていると読み取れる。

作品の最後に〈闇〉の恐怖の面を強調して終わっていることから、【闇の絵巻】は〈闇〉の安息の面を主題とした作品である【】ということには疑問の余地が残されている。

では〈闇〉に何を求めたのか。「私」は〈闇〉によって自身の心境が翻弄されることを求めたのではないかと考えている。恐怖も安息も〈闇〉の中だからこそ感じられるもので、都会では感じられないのである。この〈闇〉から得られる揺れ動く心境は、「私」が生の実感を得る上で必要なことだったのだ。

これらのことから、「闇の絵巻」の主題を【闇】に対する恐怖と安息の交錯から得られる生の実感」と読むことができる。〈闇〉は「私」に生き方を指し示している存在であり、その生き方とは、死への恐怖と、いっそ死ねば安息を得られるという諦念を対立した存在として捉えるのではなく、統一的に捉えた生き方である。どちらをも肯定し受け入れることで、心の安定を目指す。そんな生き方を「私」が模索している様子がこの「闇の絵巻」から読み取れるのではないだろうか。見方を変えれば、「私」がもはや〈闇〉の中でしか生を実感できなくなってしまうという、深刻な内面も読み取れるのである。

「蒼穹」にも書かれた〈闇〉の中へと消える男の話が作中盤に挿話の形で書かれているが、「蒼穹」とは異なった心境を示している。

〈闇〉に消える男に感じた「一種異様な感動」は、すべての命はいつか〈闇〉の中へと、つまりは死を迎え終わりに行き着く。何も自分だけがそうではない。そのような諦念的な考え読み取れる。〈闇〉に消える男を自分だと仮定し、自身は客観的な視点を獲得している。

呑気さは安堵へとつながり得ることが「闇の絵巻」冒頭部分で表されている。だとすれば、諦念的な思考から安息を導きだ

すという新たな試みが生まれた瞬間の出来事だと解釈することができるのではないだろうか。

少なくとも「蒼穹」を書き上げた時期には梶井は〈闇〉に対して感動という言葉をあてはまられるだけの心の余裕はなかったのである。「闇の絵巻」では静かな感動に浸っている「私」という印象を受けるが、「蒼穹」で「私」が感じるのは「恐怖」、「戦慄」、そして「情熱」である。いずれの言葉も「闇の絵巻」での挿話では書かれていない。「蒼穹」の挿話からはどこか焦燥感のような心の窮屈さ、余裕のなさが読み取れ、それと比較して「闇の絵巻」からは恐怖を見透かした諦念が読み取れるのである。

この諦念が「蒼穹」では全く読み取れないということが両者のもつ印象を大きく分けている要因であると考えている。そして、「情熱」が消えていることである。恐怖と共に情熱を持つようにするような「私」の志向はもはや「私」にとっては過去のもののなのかもしれない。

この挿話の違いから、「闇の絵巻」において「私」は〈闇〉を通じて【生】に対する諦念の獲得」を達成した作品でもあると考えられる。このことから、〈闇〉は「私」に生き方を指し示している存在であるとの解釈も成り立つのである。

この「諦念の獲得」は「闇の絵巻」における重大な転機であると考えられている。「闇の絵巻」にのみ、諦念的な心境が見られることが大きな意味を持つ。「冬の蠅」での「私」の生きる道は〈闇〉への情熱そのものであり、それ以外の感情は不純物と成り下がっている。「闇の絵巻」の冒頭で書かれている〈闇〉

の中で「一寸気を変えて吞気であてやれ」と思うような心境は「冬の蠅」の時点では考えられない。この心境の変化こそ「冬の蠅」脱稿から約二年の歳月がもたらした成長なのである。

安息の面を持つ〈闇〉の存在が「闇の絵巻」においてのみ書かれていることも、この諦念の獲得による影響が大きいと思われる。【〈闇〉の自覚】↓【理想の光】の喪失】↓【〈闇〉への情熱の覚醒】と進んでいた「私」の生きる道は、【生】に対する諦念の獲得】という新境地を迎えるのである。【〈闇〉に対する恐怖と安息の交錯から得られる生の実感】という主題と並び、「闇の絵巻」の主題として新たに【生に対する諦念の獲得】を挙げるのできるのである。

〈闇〉に対して生の実感を求めているはずが、その生の実感を否定する諦念的思考が同じく〈闇〉によつて獲得されているという、相反するかのような結果が生まれてしまっているが、どちらも互いが存在するには必要な過程であり、補完し合う関係であると解釈している。〈闇〉に対する恐怖と安息の交錯を経験しなければ、諦念の獲得は存在しないし、逆に諦念の獲得がなければ〈闇〉から安息を導き出すことは出来ずに、恐怖との交錯は起こらず、生の実感もできないのである。【〈闇〉に対する恐怖と安息の交錯から得られる生の実感】には、〈闇〉の存在が前提であり、それがなくては継続できないが、【生に対する諦念の獲得】は〈闇〉の存在がない生活においても継続が可能である。もともとは〈闇〉と関わることで獲得することができた諦念であるが、この諦念を基盤とした生き方は〈闇〉を必要としなくても可能である。「私」がもはや〈闇〉の中でし

か生を実感できなくなってしまうという、深刻な状況からの脱出はこの諦念によつてこそ成し得るのではないか。その試みは遺作である「のんきな患者」へとつながることが予想される。「闇の絵巻」ですでにその深刻な状況を脱出する手がかりを「私」は得ていたのである。

## 7 「のんきな患者」以降

「のんきな患者」が脱稿を果たしたのは昭和六年二月であり、昭和七年一月に『中央公論』にて発表された。梶井が生前に発表した最後の作品であり、約二カ月後の三月二四日に梶井は息を引き取っている。この作品には〈闇〉の言葉自体が使用されず、〈闇〉の風景なるものも書かれてはいない。しかし、内容は結核病と現実的な死とが圧倒的に中心を成しており、死を意味する心象としての〈闇〉が書かれていると言える。

須藤は「のんきな患者」にも〈闇〉はいまだに存在しているとして次のように述べている。

（須藤松雄『梶井基次郎研究』（改訂版）二七五頁より引用）  
死が圧倒的な中心となっていることなら、「冬の日」も「蒼穹」も「冬の蠅」もそうであったけれど、それらの湯が島時代の作品群の場合、死をめぐる創作主体の動きが、いかに鋭角であった。大阪に帰つてからの作品は、一段と死に接近したはずであるのに、死をめぐる動きは鈍角化され、死病との戦いに決定的に破れつつも、主人公はそれなりにゆとりを持つようになり、「のんきな患者」とし

て周囲の人々を捉え、悲しいながら重厚なユーモアさえ感  
じられるようになった。

この鋭角的、鈍角化という表現は、絶望への情熱の度合いと  
同意義なものだと私は考えている。この指摘における「ゆとり」  
は「闇の絵巻」において初めて獲得が果たされた諦念を起源と  
する心境であると解釈している。しかし、「闇の絵巻」のよう  
に安息を導き出す諦念ではないようだ。「のんきな患者」での  
のんきさは、現実として迫りくる死に対して客観的な態度を取  
ることから生まれている。主人公吉田は自身も結核を患ってい  
るにもかかわらず、どこか他人事のような態度を示している。  
しかし作品の後半になるにつれて、周囲の人々が結核で死んで  
いく現実を目を向け始め、抗うことのできない結核による死を  
悟ることになる。ここに安息は読み取れない。ただただ現実逃  
避して思考を停止することで死の恐怖を免れているのである。

これはもはや諦念とは言えず、ただただ空虚な心である。そ  
うせざるを得ないほど、梶井の生活の現実は厳しかったと考  
えられる。絶望への情熱にしろ、諦念から導き出される安息にし  
ろ、能動的な自己の存在が不可欠である。それが消えかかって  
いる様子が読み取れる。安息が消え、能動的な自己が消え、死  
という冷たく無味な現実のみが残った状態が「のんきな患者」  
には書かれていないだろうか。「闇の絵巻」で獲得し  
た諦念は死のゴールまでは続かず、安息のうちの死などはやは  
り幻影のような存在だったと言える。

昭和七年一月の手記を振り返ると、諦念の破綻と空虚な心境

が読み取れる。「のんきな患者」発表直後の記録であることか  
らも、関連性は高いと判断できる。

(須藤松雄「梶井基次郎研究」〔改訂版〕二七七頁より引用)  
心の最後の奴が自分が何時かは死ぬといふことをどうして  
も受け付けない、嫌がるのだ。それからあとはどう考へて  
も死ぬのが嫌だ。それで煩悶した。一昨日の夜は夕方より  
熱が少し高くいろ／＼のことに肝癢を立て深更に至った、  
すると熱のだん／＼引いてくるとともに近来になく頭が澄  
み切つて来て、自分の運命が波璃鏡に現れるやうに現はれ  
た、勿論それは苦しい運命だ、すると卑怯なやうだが急に  
死といふものが親しく見えた。いかにもそれは最後の  
安息だといふ気がするのだ。そしてそこで空想は終了だつ  
た。この六十日あまり寝てゐる間随分役にも立たんことば  
かり考へてゐたものだと思つた、この何分間か、おそらく  
五分間位の空想が一切のく／＼した煩悶を消去してしま  
ふとは馬鹿／＼しい気がした。

ここにきて生の執着が再び巨大なものになつてきている。こ  
れまでの作品に見られた梶井の行動や思考のすべてを無駄だと  
あざ笑うかのような、絶対的な力を持った病の影が感じられる。  
「闇の絵巻」での死への親しみ、そこには卑怯などという後ろ  
めたさは存在せず、素直な感動が示されていたはずである。し  
かし、「のんきな患者」以降においては死に対して反抗し、あ  
くまで生に執着する態度にこそ正当性があり、死に親しむこと  
は卑怯なことへと変化しているのである。死へと近づくとつれ



て生への執着を強めることは人として当然のことであるが、これまでその当然をあの手この手で阻んできた梶井にとつては、意外なことであつたと言えるのである。

「のんきな患者」を経て梶井が行き着いたのは、【空虚な心】を経由した先の【生の執着の再燃】という結果であつた。そこにはかつて求めた絶望への情熱を想起させる〈闇〉も、諦念と安息を導き出す〈闇〉も梶井には存在していなかつた。〈闇〉が人に死や恐怖を連想させるものという〈闇〉自体が備えている性質が変わることはない。そこに死という無味な現実しか見いだせなくなつてしまつた梶井側の変化がこの結果をもたらし、ているのである。結核の進行による生命力の欠如が要因の根本にあるのは間違いないだろう。

## 8 生き方と〈闇〉の終着点

改めて流れを整理すると次のような心境の変化を「私」は辿つている

### 【蒼穹】

- ・〈闇〉の性質は陰鬱であり「大きな不幸」
- ・〈闇〉から連想されるものは「恐怖」「戦慄」「情熱」
- ・絶望への情熱の微かな芽生え
- ・【〈闇〉の自覚】を果たす

### 【算の話】

- ・「理想の光」と「暗黒の絶望」の表裏一体関係を自覚し絶望

・ 生きる意味の喪失 生は幻影であり退屈を生きる宿命を悟る

・ 活路を見いだせない閉塞的な状態

・ 【理想の光】の喪失】を認識する

### 【冬の蠅】

・ 〈闇〉を強く求めその中に生きる活路を見出す

・ 自暴自棄の精神極まり激しい絶望への情熱を持つ

・ 〈闇〉への安息や愛は存在せず存在するのは激しい情熱のみ

・ 【〈闇〉への情熱の覚醒】を果たす

### 【闇の絵巻】

・ 〈闇〉の中の安息の発見



〈闇〉を通じて【生に対する諦念の獲得】を達成

・ 〈闇〉によって自身の心境が翻弄されることを求める



【〈闇〉に対する恐怖と安息の交錯から得られる生の実感】が目的

・ 生の実感には〈闇〉が不可欠であり親しみや愛を感じる

### 【のんきな患者】以降

・ 〈闇〉から得られる安息と能動的自己を喪失し【空虚な心】に至る

・ 死という冷たく無味な現実のみが残つた状態

・ 生に執着する態度が正当化され死に親しむことは卑怯なことへと変化

・【空虚な心】を經由して【生の執着の再燃】に至る

「蒼穹」の発表から「闇の絵巻」発表までの約二年半の間に、梶井は生きること苦悩し、どう生きるのかを模索し続けてきた。湯ヶ島での転地療養以降の梶井は、〈闇〉との出会いから実に多くの人生観を見出し、変化させ続けることで結核という自身の宿命と戦ってきた。その道のりは〈闇〉に生かされた道のりであったと言えるだろう。もともとそれは梶井が能動的に見出してきたものではあるが、〈闇〉の存在が無くしては成し得ない道のりであった。「のんきな患者」発表以降の晩年の梶井はその能動的な力を失い、かつての親しみのある〈闇〉は梶井の前から消えてしまった。梶井の生命力の衰退に伴い、〈闇〉は死という冷たく無味な現実へと姿を変えてしまったのである。ここに梶井と〈闇〉の関係の終結を見ていよう。

〈闇〉から受ける影響が安息だろうと絶望だろうと、「闇の絵巻」までに書かれた〈闇〉が梶井に与えていたのは、決して無味な死だけではなかった。空虚なものではなく心を動かす力をもった〈闇〉であった。「闇の絵巻」はそんな力を持った〈闇〉が書かれた最後の作品であり、その〈闇〉を見出せる梶井の能動的自己に限界が迫っている中で書かれた作品なのである。また、湯ヶ島での作品群での転機、あらゆる経験を止揚統合して形成されている作品であるからこそ、多数の主題と意義が同時に存在する作品と成り得たと考えている。

〈闇〉が人に死や恐怖、時として安息を連想させるものとしての性質自体は不変であり、それは多くの人々が認識している

ことであろう。しかし、その〈闇〉に惹かれ、ここまで深みを追求し得たのは、結核という名の〈闇〉を宿命として背負った梶井だからこそ成し得たことである。

「のんきな患者」発表以降の梶井は、生への執着に肯定的な態度を示す。ここまで様々な死生観を抱いてきた梶井であるが、あくまで生きること強く望んだ結果だと思われる。死を自然の摂理と受け止める諦念の境地には達しなかった。前述の手記を改めて読んでいただきたい。死に親しむことを卑怯なことと述べていることから、むしろその境地へ達することに反抗したようにも思われる。この生きんとする意志の再燃には、敗北が決定付けられている自身の宿命に意地でも刃向ってやろうという梶井の執念が感じられる。生きることが諦めはしなかったのである。

最後に梶井の死について触れたいと思う。梶井の死の直前の様子は、看護をしていた母によって次のように語られたとのことである。

（中谷孝雄 「梶井基次郎」筑摩書房

一九六九年 一二七九頁より引用）

彼は死の少し前たいそう苦しみ、むづかつたさうだ。しかし母堂が、あなたもまんざら平凡な人ではないのだからもういい加減に覚悟しなさいと論すと、それからは観念ができたかすつきり静かになり、眠るがやうに息を引き取ったといふことであつた。

臨終の際の心境を察するにあたっては、そのすべては憶測の

域を出ないものである。人が死を迎える心境に対してあれこれと推論を言うべきではないけれども、私はこの文章を読んで、梶井は実に強き人間であったと感銘を受けた。少し前の苦しみは、死の直前まで梶井が生きる執念を持ち続けた証のように思われる。死が確実なものになったと自覚できるほどになっても、生きることを諦めなかったこと、そして最後に安息と思われる心持ちを実現し得たことに梶井という人間の強さを感じた。最後に安息と思われる心持ちを得ることができたのは、様々な死生観を見出し、生きる意味を苦悩して模索し続けてきたその人生経験が、最後に手助けとなったのではないだろうか。

ここまで梶井の湯ヶ島滞在からの臨終までの人生を辿ってきたが、梶井の人生は常に病魔との戦いの日々であった。梶井を取り巻く状況は健常者の理解を超えたものであり、その中での行動や思考の一つ一つが、健常者である私達の行動や思考よりも遙かに研ぎ澄まされたものである。その研ぎ澄まされた感性は「生きる」ことへの戦いの有様を強烈に作品に残した。鈴木二三雄<sup>⑤</sup>が「病める貝殻にのみ真珠は宿る」の適例が梶井基次郎であり、残された作品が真珠であると評しているが、まさに的を射た指摘である。

死という敗北が宿命付けられているだけに、梶井の文学は「生きる」ということの追究を根底に備えている。「生きる」意味とは何なのか、その意志はどこから生まれてくるのかという問いの追究は、湯ヶ島時代以降の梶井にはまさに至上命令であった。その解答を導き与えたのが、他ならぬ〈闇〉の存在であったのだ。梶井の文学からは「生きる」ことへの苦悩の軌跡が読

み取れ、死の宿命に立ち向かった人間が確かにいたことを実感させる。私達読者に切実に「生きる」とは、という問いを語りかけてくるのである。

(1) 須藤松雄『梶井基次郎研究〔改訂版〕』 明治書院 昭和五一年二月

(2) 熊木哲『中央大学国文20』より「梶井基次郎の〈闇〉をめぐって」 昭和五二年三月

(3) 五十嵐誠毅『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第36巻』より「梶井基次郎」ノートその十一 昭和六二年三月

(4) 安藤靖彦『梶井基次郎』明治書院 新視点シリーズ日本近代文学 平成八年一月

(5) 鈴木二三雄『国文学 解釈と鑑賞』より「冬の蠅」至文堂 平成一一年六月

平成二八年四月

テキストは『梶井基次郎全集 第一巻』(筑摩書房 昭和四一年)に収録されたものを使用した。

(平成二七年度卒業生)